

高齢者の生きがい

井上勝也

生きがいは本来どの世代、どのライフステージにおいても必要なはずである。にも拘らず生きがいということばは「老年期」と殆んど對にしてあるいは老年期や老人のあたかも枕詞の如くに使われることが多い。なぜこのやうに特に老年期において生きがいが問題にされるのであろうか。その疑問に答える鍵は老人の在り方や老年期に通有する生活傾向や価値観などにあると思われる。ここでは少しく老人（老年期）の生活を概観し老年期に特になぜ生きがいが問題とされるのかを考察してみたい。

老年期(の生活)を、ひと口で描寫するとどうなるであろうか。“人格の完熟期”であつたり、“厭がしせの年齢”であつたりシェイクスピアの描くやうに”第2の幼年時代”であつたり様様ではあるが恐らく「喪失の時代」という把握、表現が最もポピュラであり、多くの人人の首肯するところではあるまいか。それかあらぬか老人關係の學會等でもよく四つの喪失、などということばで老年期や老人が概括される(注、人は多かれ少なかれ遅かれ早かれ、老年期になると、心身の健康の喪失、社會的つながりの喪失、經濟的基盤の喪失、生きる目的の喪失、の“四つを失う”という)。要するに人人はそれまで手中にしていたものを失い、それまで築きあげてきたものを失いそれまでそうであった位置を失いつつ老いを深めてゆく、という認識なのである。

むろんこれは老いの[喪失]的側面だけに眼を向けた結果であり、不
充分というより誤まってさえいる認識なのではあるが現實に世間の多
くはそう思い、そしてまた警くべきことに當の老人自身ですらも(!)自
らの老いをそのやうな「喪失過程」と捉らていることが壓倒的に多いの
である(井上勝也, 長嶋紀一, 1980). しかし自らがいわば「下降線」をた
どりながら生きている, ということに誰れがよく耐えるであるか. 何か
を失い, 能力を失い, 占めていた位置を失いつつ老いてゆく, という認
識は當の老いつつある人人にとつてはむしろ「耐え難い」認識なので
はあるまいか. 實際老人は, そのやうな[喪失]に耐え難い思いを感じる
からこそ, 「生きがい」を必要とするのである.

「生きがい」とは「生きる」「甲斐」であり, この「甲斐」とは語源的に
「貝」と同義なのである. そして「貝」は貨幣でもあり, 即ち價值あり意味
のあるものであった.(万葉集卷16, 第3810番の歌や, 竹取物語を参照さ
れたい). 従つて生きがい(貝)とは「人に生きる價值や生きる意味を與
えるもの, 事, ひと」と讀み換えることができるのである. 實際たとえ
ば「孫が生きがい」などという場合を考えてみるとよい. 無條件に自分
を慕ってくる小さな孫をみる時多くの老人は, そこに人生の安寧を感じ
幸福を感じる. そしてわが人生に「生きている(あるいは生きてきた)
意味や價值を實感する」のではあるまいか.

生きがい, はかくの如くその人に「生きる價值を實感させるところの
物や人やできごと」なのである. であるならば, 自らの人生に(四つの)
喪失を實感する老人自らの人生を「下降線」をたどりつつあると認識
する人人にとつては生きがいは必須のものになりはしないだろうか.
喪失を耐え難いと感じれば感ずる程, その人はその喪失を補い人生に
意味をもたらす「生きがい」を必要とするようになるのではなからうか.
老人, 老年期に「生きがい」が枕詞のように冠せられる背景には, このよ
うに老年期を喪失情況と捉える老人(自身)と, 周囲の認知が大きく関わ

つていると考えられるのである。

実際のところかくして老人の大多数は自分の“生きがい”を発見するしあるいは既に生きがいをもっていることを“再発見”するものである。しかし遂にその発見に至らない人人もいるし又筆者が“反社会的生きがい”と呼ぶところの、人を憎んだり恨んだりすることを生きがい対象とするような老人も決して少なくはない。今後は老人が数を増す高齢社会の進展にともなつてどのような老人がどのような条件下でどのような生きがいをもつのか、あるいはもたないのか、そのような精密な研究がより一層必要とされるようになるにちがいないと思われるのである。

参考文献

井上勝也, 長嶋紀一 編(1980). 老年心理学. 東京: 朝倉書店.

* Correspondence concerning this article should be addressed to Dr. Katsuya Inoue, University of Tsukuba, 3-29-1 Ootsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112, Japan.